

病児——朝、からだの調子がよくなかつたが家の事情からやむなく預つた様な子供に對しては、一日中氣をつけて見まもつてゐてやらねばならぬ。

4、世話の仕方

お辨當——出来る限り給食をしてやりたい。よく嚙んでゆつくり食べさせ、食後は直ぐ跳ねまわらせないこと。お辨當を残す子がゐたら、何故食べたくないかそのわけを調べてみる必要がある。ここから病氣が発見されることもあるのである。

晝寝——朝早く起され、慣れない集團生活に疲れる子供達だから、晝寝は是非させてやりたい。

(一) 床の上に筵ござを敷き出来れば毛布を一枚敷いてその上にねせる。枕はなくとも、おなかに毛布か座布團ざふだんをのせることだけは忘れない様に。弱い子はおなかを冷さない様に特に氣をつける。

(二) 鼻をかみ、帯をとき、着物をゆるめ、のびくと。

(三) おできの子や目の悪い子は離してねかす。

(四) 日光の直射をさけ、窓のあけたてはその日の温度や風の強さによつて加減する。

(五) 晝寝で汗ばんだからだその儘で夕方迄あそぶと冷えて風邪をひきやすいから、起きた時ときにからだを拭いてやるよよ。

用便——便所の掃除には特に氣をつけ、時々石灰などを撒いて消毒する。小さい子は、遊びに夢中になつてゐて遂おしつことを洩す様さまなことがあるから、一時間毎に保母が氣をつけてやる。萬一洩もらした時の用意に、かほりのパンツを用意して置くことを忘れない様に。

農村の幼児は未だパンツやズロースをはいてゐない子があるだらうが農閑期に女子青年團、青年學校等の共同作業でこ

しらへることを是非したいものである。でないないと滑り臺などで遊ぶのにこまる。あまり度々便所へ行く子には、必ず保母が便所へついで行つて大便をしらへることが必要である。

髪の手入れ——頭ぼうくで来る子供達に、髪を梳とくことの氣持よさを知らせてやりたい。頭におできなどの出来た子の髪は、最後に梳とくことにしたり、又櫛くしを別にしたりして傳染を防ぐ。男兒は學校の先生の奉仕でバリカンで刈つてもらへたらよいと思ふ。

虱退治——石鹼せっけんでよく髪を洗つて目の細い梳き櫛くしで梳く。又は二五%の酢を混ぜた水に浸した手拭てぬぐいで暫く髪を覆つて置いてから梳といてもよい、一週に二、三度繰返す。

洗眼——軽いトラホームなら辛棒強く目を洗ふことによつて治すことが出来るし、まして罹かからぬ前なら、朝夕の洗眼さえ實行してゐればうつる心配はないとまで言はれてゐる。目の洗ひ方は極めて簡單である。目洗ひ専用のコップになみくくと水をたたへ、目を水面につけて、パチ／＼と明けたり閉じたりを繰返せばよいのである。子供でも練習すれば直ぐ出来る様になる。小さい子には一寸むづかしいかも知れぬから、清潔な柔かい布か綿わたを水に浸してそつと目をぬぐつてやる。たゞの水でもよいが、硼酸水ほうさんずいならなほよい。この場合、一度毎に水を取替ること、又眼病の子の洗眼コップを別にしなければならぬこと等云ふ迄もない。

爪切り——東京市のある隣保館の子供達の切り捨てた爪の滓くずを顯微鏡で調べてみたら、黴菌かびと寄生蟲の卵が無數に発見されたといふことである。爪切りも子供の健康の爲に是非共實行したいものである。

缺の先を一度毎に消毒出来れば申分ないが、出来ぬ場合には布なり紙なりでよく拭いてから次の子に移ること。爪など切つてもらつたこともない子供達は、始めのうちこはがつて逃げ出すかもしれない。保母は、子供に手を出させ、子供の眞黒な爪の生えた手と、保母の清潔に爪をきつた手とを比べてよくみせたり、又保母同士がお互ひに爪を切り合つて

「ちつとも痛くないわ。いゝ氣持。」などと云つて、爪をきつてもらふ氣持を子供に起させるとよい。爪をきりながら、童話をきかせたり、子供のうちのことをきいたりして、楽しく切つてやりたい。

耳掃除——生れてから一度も耳掃除したことのない子も少くないだらう。固くこびりついて始末におへない耳聾はオレーフ油を脱脂綿につけて入れておいて軟くしてからとり除いてやる。「耳搔き」も出来るなら一度毎に消毒したい。

耳掃除する場合くれぐれも氣をつけねばならぬことは、子供が遊び騒いでゐる場所ではないこと、離れた静かな場所で耳朶を引張つて耳孔をひろげて耳の中を傷つけない様によく注意しながらやることである。

蛔蟲退治——海人草を一週間おきに二回位吞ませる。一人當三グラム位、二十分程煎じたものを、小猪口に一杯宛吞ませる。

5、簡単な病氣と怪我の手當

(1) 齒の痛み

蝕齒の孔から食物の残り渣をとり、鹽水でうがひをする。それでもとまらぬ時は醫者に連れて行く。

(2) 鼻 血

鼻孔に綿を詰め、鼻を冷す。靜かに仰臥させ鹽水を吞ませる。

(3) 外 傷

小さな傷はマキユロクロムをつけてをけばよい。傷がかなり深く、又その部分が汚れてゐる時等は、オキシフルで拭いてからマキユロクロムをつける。大きな傷で出血も多い時は心臟に近い部分をきつく縛り、鹽水を吞ませ、醫者に連れて行く。

(4) 骨 折

骨折の疑ひある場所を動かさない様に副木をあて、醫者に連れて行く。

(5) 蟲に刺された時

アンモニヤを塗る。腫れて痛む様な時は硼酸水の冷罌法をする。

(6) 火 傷

直ちに卵の白味か胡麻油（この他清潔な油なら何でもよい）を塗る。馬鈴薯をおろして軽くしぼり、傷の上に厚く載せ乾いたら取替へる様になると痛みもうすらぎ、癒りも早い。

(7) 腹 痛

激しく痛み且つ吐く様な場合は盲腸炎、脱腸、腸閉塞症等のことがあるから注意して、醫者に診せねばならない。又、今迄何ともなかつた子供が急に元氣がなくなりグツタリしてうとく眠り、熱も高い様な時は疫痢の疑ひがあるから、これも直ぐ醫者に診せること。

(8) 咳 嗽

顔を眞赤にして發作的に咳き込み、粘液を口から出す様な時は相當進行した百日咳と疑はねばならぬ。併し前にも書いた通り、特有の咳が表はれぬ初期の中こそ傳染力が激しいのだから、村のどこに百日咳の子が居るかを前以て調べて置き、その近所から来る子は特に氣をつけねばならない。犬の遠吠の様に後に引く咳をして、口をあげさせて咽喉を見ると扁桃腺に白い苔狀の膜が張つてゐる時は、デフテリーを疑はねばならぬ。

以上はごく簡単に觸れたが、病氣や怪我の時は出来るだけ早く保健婦なり醫師なりに相談することである。變り事があつた時だけ頼みに行くといふ風でなしに普斷から保育所の仕事に就てその土地の醫師や保健婦に理解し協力して貰ふ事の大切なのは云ふ迄もない。

よい習慣

七〇

よい習慣と一口に云つても、それが成長しつつある子供にとつてどれほどの意味を持つものであらうか。愛育會兒童教養相談所の山下俊郎氏の言葉をきかう。

乳児、幼児の時期はわたくし達の長い一生のいはゞスタートであり、この間に色々の生活の営みが始まり、始まると同時にそこには色々の営みの關係する色々の習慣が出来て行く時期である。丁度つきたての軟かい餅が段々冷えて固まつて行く有様に似て居るのであつて、どの様な形に固まつて行くかはその冷えて行く途中でどういふ風に扱はれるかによつて定まる。つまりそこには色々の習慣が出来る事であつて、幼児期の軟かい餅が色々の形に固まつて行くのであつて、これがわたくし達の一生の生活の型のもとを定めて行く事になるのである。だから幼児期の習慣は保育の立場から言ふと非常に大事なものであると考へられるのである。』(山下俊郎氏著「幼児心理学」二八七頁)

この言葉をよく味ふならば人の一生に付きまといふよい習慣もわるい習慣もすべて子供の頃にそのもとがあるといふことがわかる。言葉をかへて云へば、人間がいつも健康でキチンとしたくらし方をするか、又不健康、不しだらな生活を送るかの岐れ目は、子供の頃の習慣のつけ方の如何によつてきまるとすらみてよいのである。保育所の健康保育にしても、たゞ外部から子供のからだを護つてやるといふことはほんの一部分の仕事であつて、衛生的な習慣を子供自身の身につけてやる、ことこそ何にもまして大切な事なのである。

では保育所では、短い期間の中に、どんな習慣をどの様な方法でつけて行けばよいのであらうか。先づつけるべきものとしては、清潔、食事、晝寝、用便の四つについての習慣を主として考へてよいと思ふ。毎日のくらしの中でこれ等の事を行ふそのやり方の中で、(1)自分勝手にしないこと、(2)自分に出来ることは自分ですること、(3)からだを丈夫にする爲に必要なことなどの習慣を養つて行く。今、一つ一つの場合について簡単に書いてみよう。

(イ) 清潔の習慣

(一) 手洗ひ——季節保育所の子供に眞つ先に教へ度いのは手を洗ふことである。近頃東京に水洗式の便所が随分殖えたが、その割に傳染病が減らない。これは、傳染病を媒介するのに蠅よりも人間の不潔な手の方が遙かに大きな働きをする證據であると云はれる。

保育所に集つた子供達に手を洗ふ習慣をつけることに成功したら、更に村人達に手を洗ふことの必要を理解させたら保育所はその村の健康の爲に大きな仕事を成し遂げたことにさへなるのである。

一日の中次の場合には必ず決めて手を洗はせたい。

お集りの前、食事の前、歸る前、便所から出た時。

その他いつでも手が汚れたら自分で氣つき、自分で洗ふくせをつけたい。同じ手を洗ふにしても、いろんな洗ひ方があるわけだが、特に「指先をよく洗ふ」ことを教へる。

手拭ひは出来るなら一人一人別に持たせたいが、それが出来ぬ時は幾枚かはぎ合せて輪に縫つてをき、竿などにかけてをいてグル／＼まわしながらつかへば一と所だけ汚れるのを防げる。

(二) うがひ——手と共に口の中をきれいにすることを忘れてはならない。やりつけない子供にうがひを教へるのは一寸困難かもしれないが、保母は子供と一緒にコップを持ち、「ガラ／＼ブク／＼」などわざと面白く聲を出したりしてやつてみせる。「誰が一番上手に出来るか」などと、うがひ競争をやつてみるのもよい。

(三) 鼻かみ——子供が鼻をたらししてゐるのを見つける度に、「お鼻は？」と注意してやる。これを繰り返して、鼻の下を

きれいにしておくことに慣れると、子供は、いけないとめられても鼻をかますにはゐられない迄になる。片言しか云へない様な小さな子でさえも、「ハナ、ハナ」と云つて大人に鼻をかんでもらふのを催促する様になるものである。新聞紙でも、包み紙の反古でもよい（役場や學校から古い書類をもらつて來てもよいだらう）から小さく切つて、保姆はポケットにいつも用意して置く。勝手に持ち出していたづらすることのない様なしつけが出来てゐるなら、箱に入れるとか釘に吊すとかして置いて、子供に自由につかはせるのもよからう。

つかつた後の鼻紙をあちこちに散らかさず一定の箱へ入れる習慣もつける。

鼻のかみ方——一度に強く嚙むと中耳炎などの原因となり易いから、片方づつ静かにかむことを教へる。

(ロ) 食事の習慣

(一) 食事の前の手洗ひ、うがひ。

(二) 「いただきます」をして一緒にそろつて食べる。すんだら「ごちそうさま」を云ふ。

(三) からだを真直にして食べる。

(四) よく嚙んでゆつくり食べる。

(五) こぼさないで食べる。

(六) 食事の途中でいたづらしたり、立上つたりしない。

(七) 食べ終へてから少しの間静かにしてゐる。

(八) 好嫌なく何でも食べる。

(ハ) 晝寝について

(一) 横になつたり起上つたりふざけたりしないで静かにしてゐる。他の子の眠りの邪魔をしない。

(二) 俯伏せに寝ない様に。よく俯伏せに寝るくせの子がある。大低からだの弱い子であるが、習慣から來てゐる點もあるから、ねついたり頭そつとからだの向きを變へて置いてやる。

(ニ) 用便について

(一) おしっこは庭の隅などにせず必ず便所にする。

(二) 遊びに夢中になつてお洩らしをしない様に。又おねしよをしない様に。

短期間の間にこの癖をなほすのはむづかしいであらうが、次の様な心掛けをやつてみる。

1、小さい子がおしっこの出る前に氣づかなかつたら、出てしまつた後でもよいから、「おしっこ」と告げさせる。「おしっこをする」といふことに意識を持たせる爲に。

2、たまに出る前に教へたら心からほめて奨励してやる。

3、失敗した時に餘り強く叱ることは禁物である。子供は恐怖心から來る暗示にかかり、却つて度々失敗する様になる。

(三) 便所をよごさない様に。これには便所の構造が大いに關係して來るが、正しいからだの位置を教へる爲、床に足型を書いて置き、その上へ足を置く様に教へるのもよい方法であらう。

(四) 便所から出たら必ず手を洗ふ。

(ホ) この他、後片づけ、下駄をキチンと揃へる、お辨當などはきめられた場所に整頓する、などの習慣も養ひたい。

この様なよい習慣をつけるには、どんな方法でやつたらよいか、

(一) 喜んでやる氣持を起させること

先づ最初に大事なのはこれである。「手を洗ふことは面白いな。」「爪切りはたのしいな。」と思はせることである。それに

は、お話や遊びなどに仕組んでやるのも一つの方法である。又、「きれいだね」「いい子だね」などとほめて獎勵することもよい。

(2) 手順正しく繰返す

一つの行ひを習慣にしようと思つたら先づ手順をきめ、いつもキッチンとその手順でやることが必要である。例へば食前の用便、手洗ひ、うがひ等の習慣をつけようと思つたら、五、六人づつ便所へ行き、洗面所で手を洗ひ、次にうがひをする、といふ風な手順をきめ、いつもその通り實行するのである。或る日はうがひが先になつて便所が後になつたりしては、子供がまごつくばかりである。何度も同じ手順で繰返すうちに、ひとりで行動が子供の身について来るのである。誰に教へられなくともひとりで出来る様になつたら、今度は何度も何度も辛棒強く繰り返してゐるうち、それが、抜くにも抜けきれぬ習慣となるのである。

(3) 母親と力をあはせて

此の様な習慣がやつとつき始めた頃は農繁期も終り、子供は保母から離れて母親の傍でくらす様になるのである。折角保育所でつけられたよい習慣が後戻りして、保母の努力が水泡に歸することを防ぐ爲には、どうしても母親と力をあはせる事が必要になつて来る。

朝晩の送り迎への時など、母親の方から

「おらの子は此頃まゝ食ふ前に手を洗ふとてきかなくて——。」

などと云ひ出すことがあるに違ひない。この様な時を捉へて、汚い手がどんなに恐ろしい病氣の媒となるかを實例をあげて話してきかせよう。

けれど實際には、短い期間に、しかも寸暇なき激しい労働の時期に、母親教育迄しようとするのは殆ど無理に近い。

それだからと云つて擲つのは勿論間違つてゐるが、常設保育所への發展こそ多くの困難の打開策であることを保母はこゝでも身に沁みて感じさせられるであらう。

たのしい遊び

長い一日を飽きず面白く遊ばせるにはどうしたらよいか。保母が一番苦心する此の問題に就て考へてみよう。

遊びといふと、遊戯や唱歌を教へたり、いろんな細工物をさせたり、何か特別なことの様に考へられ易いが、實は、朝から晩までの子供の生活はすべて遊びと云つてもよいのである。遊びといふことは子供にとつてはそんなにも自然なことなのである。保母は先づこの點を呑み込んでおかねばならない。

この點がよくわかつてゐるさへすれば、講習で仕入れた遊戯も唱歌も手技も教へつくして、さて今度はどうして子供を遊ばせようか途方にくれる心配もないし、無味乾燥なしつけを無理強ひにして「託児所なんて一寸も面白くないや。」と子供に逃げられることもないのである。この點さへよく呑み込めてゐるならば、先に書いたよい習慣などは、楽しいあそびのうちひたすらに養ふことが出来るのである。

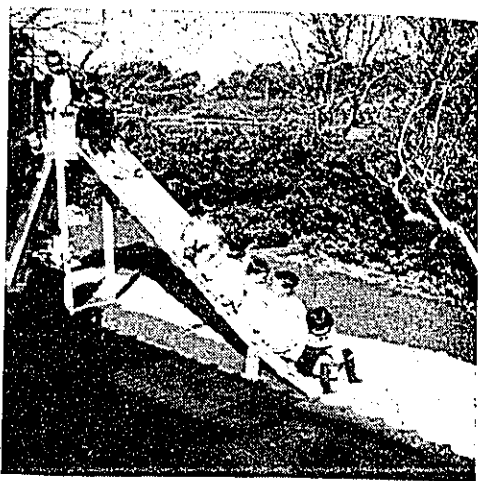
例へば、先を争つて手洗ひに行かうとする子供達にむかつて、「ちゃんと並びなさい。」と大聲に叫んだらどうだらう。何の効果もないばかりか、子供達は、興奮してゐる保母を見て却つて面白がつて騒ぎ出すかもしれない。けれど、若し「さあ皆汽車になつてごらん。よい汽車から手を洗ふことにしませう。」とか、「二列にならんで、むかひ合つた子とジャンケンして順番を決めよう。」とか云つて遊びにむすびつけければ、面白さの中に一人づつ整然と手洗ひが出来るのである。

鼻かみ競争も出来るし、下駄揃へ遊びも出来る。かうして遊びの中へ生活を融け込ませ、生活そのものを遊びとして行

く心構へが、保育所の生活を楽しいものにする一番の基である。

次に心掛けねばならぬことは、**子供の心をしつかりと捉へること**である。心から夢中にならせ、面白がらせることである。優美なおどりを教へたり、むづかしい手技を半分は保母が手傳つて完成させたとしても、肝心の子供が苦痛のみを感じる様では何もならない。都會のハイカラなお嬢さんの話をしてきかされたつて村の子供の心を捉へることは出来ない。どうしたら子供の心を捉へることが出来るか。児童心理學の本を讀んで子供の心の動きを科學的に掴むことは勿論大切である。けれども一つ大事なことは、子供と一緒に遊びながらそれを身を以て感得することである。何の學問もない母親が、經驗の浅い保母などより遙かに旨く子供の心を捉へる術を心得てゐるのも、母親がいつも愛を以て子供をまもつてゐることからである。保母は自分の要求を子供に押しついたり、自分の望む方へ子供を無理矢理引つ張らうとする態度を捨てて、いつも子供が何を欲してゐるか、どういふ氣持でゐるかを先づ知つてやらうと努めなければならぬ。こゝろいふ態度で一緒に遊んでゐれば、本は讀まなくとも或程度迄子供の氣持がわかる様になるし、本を讀んでも直ぐ實際に活かすことが出来る様になるのである。

子供の心を捉へることが出来たら、今度はもう一步進んで、遊びを積極的に指導することを考へよう。ではどう指導するか。それにはいろ／＼あらうが、ここでは特に「**皆と一緒に仲善く遊べる様に**」指導することを問題としたい。「**社會性の訓練**」と云つてもよいであらう。今迄一人で家の附近で遊んだり、兄さん姉さんの後について遊んでゐた子供達は、大勢で一緒に遊ぶことに慣れてゐない。小さいからと云つて我儘勝手も許されてゐる。子供をこゝろいふ状態に放任して置くなどいふことになるだらう。子供はいつ迄も自分だけの狭い世界しか知らず心身の發達がおくれるだけでなく、大きくなつても社會と調和することを知らぬ困つた人間になり易いのである。三、四歳で社會性の目ざめ出す頃から子供を集團の中で育て社會性を訓練することは、子供の正しい成長の爲に是非共必要なことなのである。そして四十人も五十人もが



ねうらべすに番順



あゝ小さい魚が



(引綱)なるけまもちつど



ぶそあで木積の竹と箱空



び遊砂てえ植も草

一緒になつて遊ぶ保育所こそは、この爲に絶好の場所なのである。

今迄述べた様なことを、實際の遊びの中でどう生かして行くか？ 参考の爲いろいろ遊びの例を擧げてみよう。

(イ) 自然の中で、自然物をつかつて

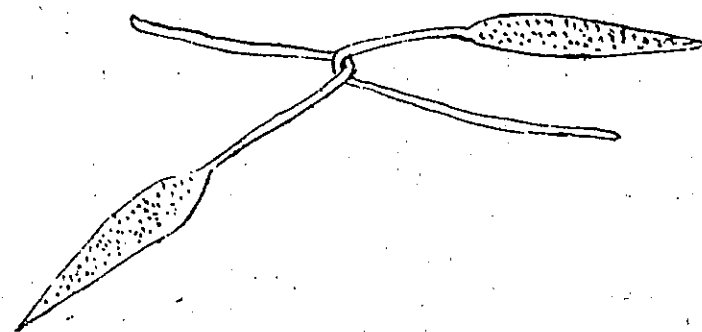
季節保育所の保育は、狭い室内で外へ出たがる子供達を押へつけて遊戯や手技を詰めこむことでなく、出来るだけ青天井の下に出て、自然の中で駆け廻り跳び廻り、自然を観察し、自然の中からいろいろ工夫して遊び道具を作り出すことでなければならぬ。

お天氣のよい日は近所の野原や河原へ散歩し、時には少し遠い山などに遠足したいものである。危くない限りならば子供を束縛しないで、思ふ存分駆け廻らせ、暴れさせたい。鬼ごっこ、かけくらべ、角力、綱引き、縄とび、まごこと、何でもよい。又子供達ははつたや蝗を夢中になつて掴まへ、馬ごやしの花などを蒐めるだらう。かつて私達も子供達にせがまれて、手にく紙の袋を持つて蝗取りに行つた。その時の子供の夢中になり様といつたら！ 三つ四つの小さい子までとても上手に掴まへるのである。その蝗は皆一緒にして、お砂糖と醬油で煮て次の日のおやつにした。栄養價高くおいしいおやつが出来たのである。馬ごやしの花で腕環や胸飾りを作れば、女の子は女王様になつた様な喜び方である。赤土は粘土のかかりになる。おだんご屋さんごっこをしたり、豚や牛の形を作つたりして遊ぶ。河原へ行けば魚堀も出来る。石ころあつめも出来る。皆の拾つて来た石ころを集めて色や形や大きさを考へてみることも出来るし、數へてあそぶことも出来る。石にクレヨンで目鼻を描けば人の顔になるし、細長い石は汽車の玩具のかかりにもなる。

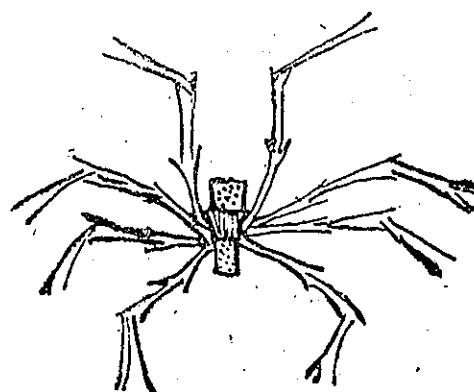
かうして思ふ儘遊ばせる中には、靜かに自然を観察する機会をも捉へたいものである。蟻が長いく行列を作つて蟲の死骸を巢に運ぶ所を見るのもよいし、水溜りを泳ぐ水すましの様子に氣をつけてみるのも面白い。又空の雲などを時として子供は熱心にみまもることがある。或る秋の日、私達は近所の山へ遊びに行つたことがあつた。その時、勝次といふ、

いつも我儘で手に負へない子が珍しくおとなしくしてゐると思つたら、じつと空をみつめてゐるのであつた。丁度一塊の雲が太陽を呑み込んで、雲のきれ目からかすかに淡い光が洩れてゐた。じつとそれを見てゐた勝次は、私が傍へ行つて坐ると、「センセ、オヒサン ナシテ クモンナカサ ヘツタノカ。(お日様が何故雲の中へはいつたのか)」ときくのであつた。

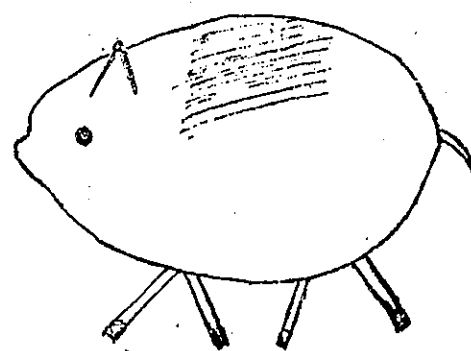
そして猶もじつと空を見上げてゐるが、



大葉子角力



蜘蛛



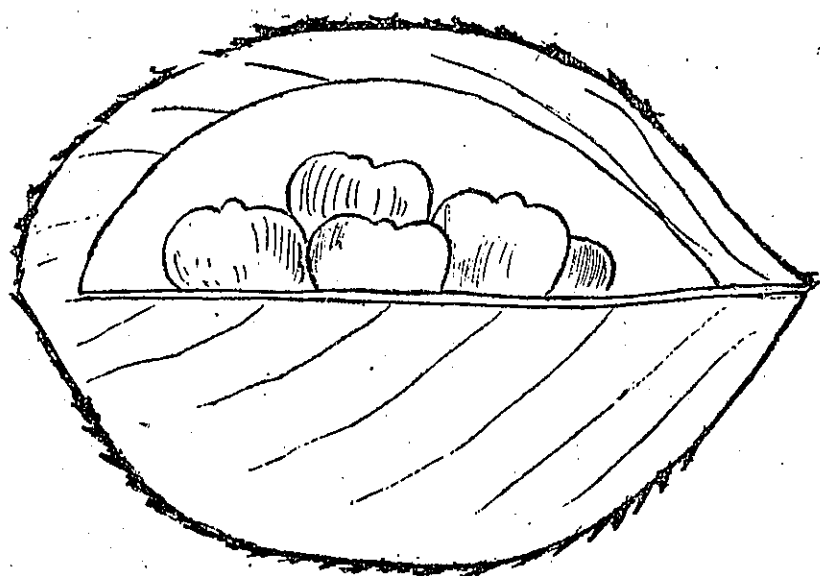
豚

「オヒサン クモンナカデ サムイ トフルエテルンダベ センセイ。」

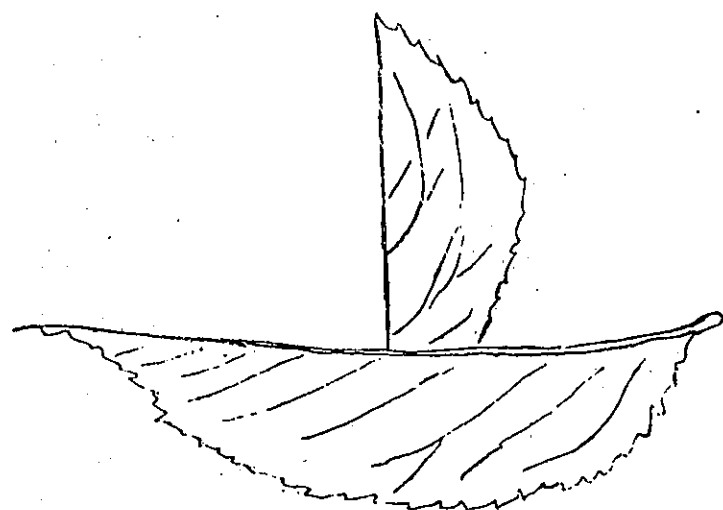
自然物おもちやの一例 (七八—八〇頁挿繪参照)

◇大葉子角力

大葉子の穂を一寸揉んでからみ合せ二人で引つ張り合ふ。



果物籠



櫻の葉の舟

◇ 蜘蛛

すぎなの一節を切り、莖を蜘蛛の體とし、葉を節から折り曲げると蜘蛛の脚となる。

◇ 粘土おだんご

粘土に蓬をまぜて丸め、ヒゴ又は細枝に通す。

◇ 粘土型取り

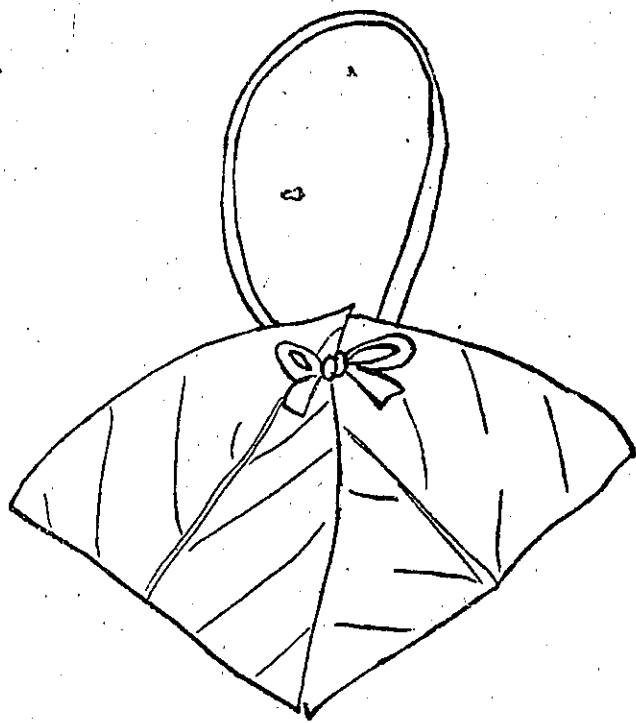
粘土を平にしておき葉をのせて壓し、周りを粘土で切り取つて型取りする。

◇ 豚

馬鈴薯に、細いそだを折つた足をつけ、尾にヒモをつける。

◇ 櫻の葉の舟

櫻の葉の舟



柿の葉手提げ

◇ 果物籠

大小二枚の櫻の葉を各二つに縦に裂き大きい方を舟體とし、小さい方を帆とする。紙にはる。
紫陽花、柿等幅の広い葉を横に置き、上部に缺を入れて籠の手とし、貼紙の果實を覗かせる。果實は紙にクレヨンで書いてそれを切抜いたのも面白い。

◇ 柿の葉手提げ

広い柿の葉を、上の方を廣くして三角形に折りたゝみ、紐をつける。紐は、大葉子等丈夫な草の莖をつかふ。

ブランコ



以上は主として、新潟縣中蒲原郡金津村保育園根岸まつえさんの工夫によるものである。昭和十四年八月の新潟縣保母講習會のテキスト「自然物おもちゃ」中にこの他にもいろ／＼面白い自然物おもちゃが出てゐるから、根岸まつえさんへ直接問合せられたらよい。

(ロ) 郷土の遊びを生かして

どの土地にも、古くから傳はつてゐるなつかしい郷土の遊びがあるものである。「花いちもんめ」、「子とろ」、「お狐さん」など、土地によつていろ／＼であらうが、保育所の遊びの中にもこれを取り入れることを忘れまい。

(ハ) 様々の遊具・教具を用ひて

1、ブランコ、滑り臺等

これらの遊具で遊ぶ時は、自分勝手を抑へて皆で仲よく遊ぶ練習をするに最もよい機會である。我も／＼と先を争つてばかりでは、いつまでたつても誰も楽しく遊ぶことが出来ない。これを先づ子供自身に氣づかせるがよい。そして、ブランコなら、「ブランコ、ブランコ、一つ、二つ、三つ……」、滑り臺なら、「滑り臺なら、汽車になつてならんで一人づつ滑ると面白い、といふこと等を教へてやる。

2、砂 場

砂遊びの道具には、立派な物をつかふ必要は少しもない。杓子、しゃもじ、お椀等

の古くなつて缺けた物、竹筒、木片、石ころなどあれば、子供達は飽きずに遊びを創り出して行く。草をとつて来て植えては庭を作り、石をたてては「お墓」と稱して眞剣に拜んでゐる。さうかと思ふと商賣人も顔負けする様なおいしさうなおだんごを十も二十もならべたり――。

砂にはいつも適當な濕りをつけておくこと。砂場の一部に、乾いてサラ／＼した砂を残して置くならば、子供達は砂糖だと云つて喜ぶだらう。

3、人形

一つか二つしかない人形で皆が楽しく遊ぶにはどうしたらよいか。ままごとなどにつかふのも一つの方法だらう。又こんな遊び方もある。

子守りごっこ

子供たちをまるく坐らせ、「今から赤ちゃんがネンネするの。皆でかはりばんこにお守りしてあげませう。」といひ静かなレコードかオルガンに合せて、一人つつ人形を抱いてはひとまはりし、次の子にわたす。かうしてかはる／＼人形のお守りをするのである。これは子供達の氣持を落着ける爲にもよい遊びである。

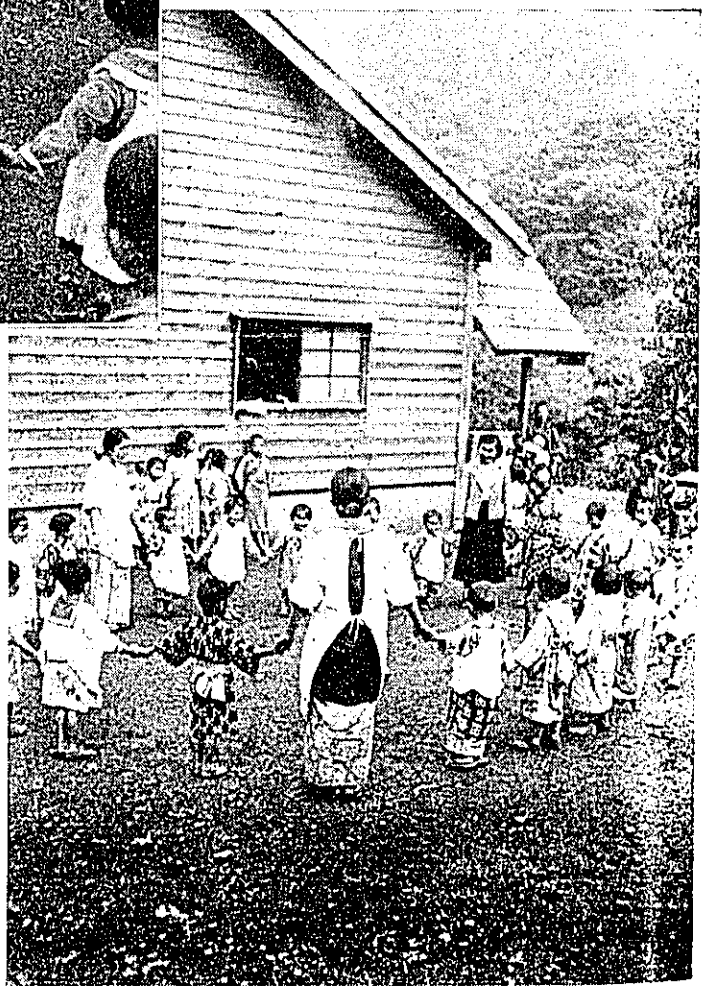
4、繪本

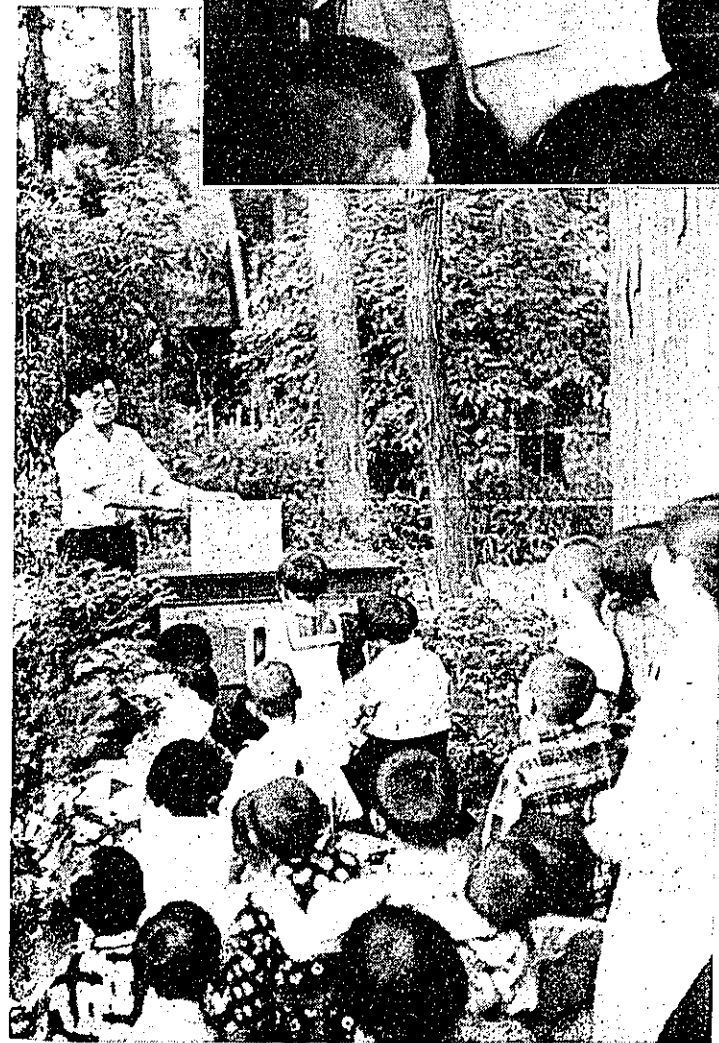
繪本も又子供達の大好きな物である。開所當時のお集りの時など、いくら手を叩いても笛を鳴らしても子供達が集つて来ない様な時、一冊の繪本を掲げて保姆が立つならば、たちまちその周圍に子供達は先を争つて集つて来るだらう。

繪本を見せる時は、何でも彼でも保姆が説明してやるといふ態度でなく、子供自身で繪の中からいろ／＼發見し、疑問を起し、想像を發展させる餘地を與へてやりたい。保姆の手の繪本を皆で一緒に見る時は又社會性の訓練のよい機會である。小さい子を前にして大きい子は後にならぶこと、自分勝手に立上つて皆の邪魔をしないことなどがまもられね

みんな

たのしい遊び





をちさん、俺にも持たせてくれ！

(人形芝居)

居芝紙で蔭木いし涼

ば、誰もが楽しく繪本を見ることは出来ないのだから。

5、紙芝居

例外なしに喜ばれる紙芝居は、その内容をよく調べてから選びたい。子供の興味に媚びるばかりで、少しも子供の生活を導いてくれぬ様なのが多いのだから。

説明の仕方にしても、たゞ話のすじを追ふばかりでなく、一枚々々の畫面を落着いて細かに眺めたのしむ様な見せ方が試みらるべきであらう。その爲にもよい繪を選ばねばならない。

又時には、保母も見物人となつて、子供自身に説明させるのも面白い。

6、人形芝居

紙芝居より更に生き／＼としてゐて子供も喜ぶのは人形芝居である。人形芝居といふと如何にもむずかしさうだが、保育問題研究会松葉重庸氏の作り方によれば、とても簡単に誰にでも出来る。(「保育問題研究」昭和十五年一月三月號参照) この人形芝居を使つて、楽しく見物させ、笑はせながら、子供の社會性を訓練し、よい習慣を養つて行くことが出来る。

7、折紙芝居

これは子供でも出来る折紙をつかつてのお芝居で、前記松葉氏の考へ出されたものである。(「保育問題研究」昭和十三年一月號参照) 折紙の豚や福助などに糸を通して手であやつり芝居をさせる、簡単に面白い遊び故大いに利用するとよい。

8、蓄音機、ラヂオ

ふだん文化に恵まれることの薄い村の子供達に、蓄音機、ラヂオ等を通して廣い世界を知らせ、豊かな生活内容を與

へることも又保育所の大事な役割であらう。ここでも又、他の子の邪魔をせず一緒に楽しく聴くといふことがしつづかれねばならない。

9、おもちゃはどこにもある

身近かに転がつてゐる物、不用品として捨てられてゐる物の中から、工夫一つによつてはいくらでも面白い遊び道具を作り出すことが出来る。例へば

(1) 包み紙の反古や新聞紙の利用

旗……新聞紙か包み紙を幾つかに切り、薬罐の蓋かお椀などで圓を型どり、その中をクレヨンで赤く塗つて日の丸とし、川原からとつた葦、又は山からとつて来た笹の莖にはりつけければ立派な旗が出来る。

この旗一つあれば、兵隊ごっこに行進あそびにどんなに面白く遊べるかわからない。

かぶと……新聞紙でかぶとを折り頭にかぶつて大得意で遊ぶ。

人形……模様などついた包み紙を着物にして、人形を作つてあそぶ。

袋……袋を作り、花や草や虫などをその中に蒐めてあそぶ。

(2) 木片

木片を小學生にでも集めて持つて来てもらへば、町で賣つてゐる物より却つて面白い積木になる。

(3) 繩

端と端を結はへて中に子供が大勢はいり、汽車ごっこをする。繩とびも出来る。

(4) 箸及び粗朶

箸の古いのが澤山手に入れば、色々の長さに切つて箸ならべをして遊ぶ。箸の代りに粗朶をつかつてよい。

(5) 米俵・炭俵

又まあるく坐り、皆で揃つて調子に合せて床を叩き、太鼓叩きの遊びをすることも出来る。

普通俵を二重にし、中に小石と匏屑を一緒に詰める。

古くなると藁屑で散らけるから南京袋かズツクの被ひを掛ければ理想的、目方も大、中、小を作りたい。

(6) 砂 壘

ズツクか古布で二重の袋を作り、中に砂とオガ屑等を入れる。

これも俵と同じ様に様々な遊びに利用出来る。

(7) 空 箱

材料は成可く大小取りませ、匏をかけて、釘はしつかり打ちつける。出たり、はいつたり、飛び下りたり、家を造つたり、汽車ごっこしたりする。

(8) 機械體操

自然の木二本の間に竹竿（しつかりした物）をわたし、繩か綱でぎつちり結はへつける。

(9) ブランコ

これに綱か丈夫な繩を下げればブランコになる。

(10) 青竹積木

太い竹、細い竹を様々に切り、積木にする。

(5)から(10)迄は前掲根岸まつえさんの工夫による物である。

(二) お話

何の道具もなしに出来て、子供の好きな物はお話である。

お話を選ぶ場合にも子供本位に考へて、親み易い子供の身の廻りの物事を材料にして、言葉なども普断その村で皆のつかつてゐる言葉で話してやりたい。併し時にはお話によつて外國のこと、都會のことなど子供がまだ見ぬ廣い世界のことを知らせることも必要だ。併しこの場合も毎日の子供の生活とよく結びつけて話すことである。

保育所の生活に段々慣れて來たら、子供自身にお話をさせるのもよい。又、あらたまつたお話でなく、日なたぼつしながらまるくなつて語り合ひもしたい。自分の思ふことをはつきり話す練習と一緒に、人の話をよくきく練習も、この語り合ひによつて養ふことが出来る。

「うちの豚が子を生んだよ。」

「うちにお芋がいつばいあるよ。」

等何でも子供に好きなことを話させ、保姆も一緒に聞き且つ話をする。

(ホ) 唱歌、遊戯

先づ子供達が親しんでゐる唱歌や遊戯を保姆も仲間になつて一緒にやることから始めよう。「ハトポツポ」「お手々つないで」など、その土地々々によつて違ふであらうから、保姆は先づ始めに子供達や小學生から教へてもらふといふ様な氣持でやるといふ。

そして段々慣れて來たら、新しいのを教へるが、その教へ方にしてもどこ迄も子供本位に考へて、單純なもの、面白いもの、子供の毎日の生活に近いものを教へてやりたい。

例へばハイカラな都會生活を唄つたものや、優美ではあるがむづかしい振付の遊戯などは村の子供にとつて一寸も嬉しくはないのである。

村の子は一般に、元氣で單純で活潑なのが好きだが、殊に男の子はさうなのだから女の子向きのものばかりやつて男の子を退屈させない様に氣をつけねばならない。

(ハ) 手技

先に書いた様な、自然物や身の廻りの物をよくいかしたものがよい。

簡單で、お手傳ひなしに子供の手で出来る物、これは易くない物、そして出来るならそれをつかつて遊べる物(旗、かぶと、袋などの様に)がよい。

年齢に應じて大きい子には少し手のこんだのを、小さい子にはやさしいのを教へることも忘れてはならない。又、皆で力を合せて一つの物を作り上げる様な方法は、保育所の生活に慣れて來たら是非試みたいものだ。例へば、新聞紙を継ぎ合せた大きな紙にいつばいに木を描き、それに皆で銀杏の落葉をはりつけて銀杏の木を作つたり、もみぢの葉をはりつけてもみぢの木を作つたりする。(葉はひと晩位新聞紙の間に挟み、押しを置いて水氣を去つて置くと糊がつき易い。)又、紙くさを皆で作つて長くくつなぎ合せ、部屋の飾りにするのも面白い。

(ト) 繪描

鉛筆やクレヨンをつかつて好な繪を描くことも面白い。必ず紙の上に書かなくとも、土の上に棒で大きく描いたり、如露や薬罐の水で水繪を描くことも出来る。

(チ) 集團あそび

保育所の生活に慣れて來たら、附録に示した様な集團あそびをしてあそびたい。やさしいもの、興味本位のものから始めて、少しづつ複雑なものに發展して行く。この様な、皆が心を一つに集め力をあはせて遊ぶ集團あそびこそは、子供の社會性を正しくまもりそだてるに一番よい方法なのである。

給食

ある季節保育所で、閉所式の晩、母の會を開き、保育所へ子供をよこしてゐて困つた點につき、お母さん達の聲をきいてみた。

お母さん達の答へは次の様なものであつた。

- (1) 着物、辨當箱、バスケット等、託児所行きは道具を集めるのが苦勞である。
- (2) 子供が歸つて来て、友達達の辨當は何だつたから、あれを入れてくれとせがむ。
託児所では、卵のおさい許りだと云ひ卵でないといやだと、ぐづる。
又おすしがほしい等言つてぐづる。
- (3) 託児所がいやだと言つて行かない。
午睡をさせられるからいやだと云ふ。そして家では、クレヨンで書いたり、ねいさんごつこをしたりして遊んでゐる。
- (4) 小學校の先生が、或部落の小學生が書いた作文を讀んだによると、妹が卵を入れてくれとせがむので家中が不愉快になる、早く託児所なんか終つてしまへばよい、(「保育問題研究」昭和十四年八月號栗田道子氏「農繁期託児所の母の會」)

以上四つのうち三つ迄がお辨當の問題であることは何を示すか。實際、猫の手も借りたい農繁期の忙しさの中で毎朝お辨當を作る手間はなみ／＼のものではない。單に手間がかかるといふだけではない。「人中に出るのに、あまりみつともないことも出来ない——。」といふ心づかひが又それ以上に大變なのである。家で食べる麥飯とは鍋を別にしてお辨當用の白い御飯を焚く、家では減多に口にしない卵焼きを作るなどといふことがどこでも行はれる。たとへ親にこの氣がなくて

も子供が承知しない。隣の子のおかすを羨しがつてはどんなに家の者を悩ませるか、母達の卒直な聲がよく語つてゐる。お辨當に困るといふそれだけのわけから、本當は一番保育所を必要としてゐる筈の貧しい農家が却つて保育所に子供をよこしたがる、といふことが起つて來るのである。

では此の問題をどう解決したらよいか。先の母の會では話がどう發展して行つたであらうか。少し続きをよんでみよう。

「但し一番困るのは、何と云つてもお辨當だね——」と、再びおかすの問題に話が歸つた。どんなにお母さんが託児所の趣旨を理解し、おにぎりや、カップンにしても、子供の關心は、友達達の違つた食物にむけられ易いのである。

「だから、みんな、一緒の物が食べられるといふね。」

「ほんとにさうだよ。さうなると樂だよ。」

と、母達は嬉しさに、今にも實現しさに微笑むのである。盛な託児所では、榮養食や立派な設備がなくても、皆が一緒に共同炊事をし、現物を持合してやつてゐる事が話題に上る。母達は、元氣になり、一人づつ毎日當番をきめてもいゝよ等と言ひ出した。

——三十人以上はゐるのだから、十四日間位、直ぐ過ぎてしまふ。仕事で忙しい人はやめて出來る人ばかりやればよい。

無理にいろいろのおさいを作らなくとも、おにぎりでよい。どこの釜を持つてくれればよい——等と目くばせをして話を進める。そして本當にさうなるといふねとつく／＼感心してゐるのである。又、おやつのごとも、馬鈴薯やおだんごを作ればよい、などと話される。

さうだ。お母さん達の云ふ通り、この問題の解決法は給食より他にないのだ。

給食を實行すれば母親達の手も省け、皆が安心して保育所を利用する様になり、そこで始めて保育所は村にとつてなくてはならぬものとなる。そればかりではない。給食をすれば、

(1) 子供のからだが丈夫になる

普断から栄養不足になり勝ちな村の生活であるが、殊に農繁期には自然ありあはせの食物で間に合せる様なことからひどい栄養不良となりその為病気が起るといふ様なことがよくある。栄養のあるおひるを作つてやることは、この禍から子供のからだを護ることになる。

(2) 子供によい習慣をつける

皆が揃つて同じ御飯を食べることは、子供達にとつてもどんなに嬉しいことであらう。この機会に、社會性の訓練や、清潔の習慣を養ふことが出来るし、偏食を矯すことも出来る。

(3) お母さん教育

お母さん達に手傳つてもらふことが出来れば一番よい。保育所はえらい人がお恵みで子供を預つてくれる所ではなく、お母さん達が自分達の手でまもり育てて行くべきものだ、といふことが、ここから段々にわかつて行くであらう。そうして更に、一寸の工夫により簡単に栄養食が作れることも覚え、子供のからだに就て氣をつける態度も養はれて行く。

(4) 共同炊事への發展

保育所の栄養給食の實施は村人達に何を教へるか。一軒々々の家が孤立して、苦しい見榮を張つて、子供のお辨當に手を掛けてゐたことがどんなに無駄骨であつたかといふことである。交代に手傳ひに出たとしても、共同でやるといふことは何と手間も省けつまらない心配もいらなくて便利なことだらう。實際によつてこれを悟つた村人の心を共同炊事へと動かすのはもう一步である。

此頃各村で共同炊事が行はれる様になつて來たが、どの村の實例を見ても、婦人の過勞を防ぎ、村人の健康を増し、生産能率を高め、食費の節約ともなり、栄養の知識や料理の方法も覚えられるなど實行してみても始めてわかるその便利さに驚いてゐる有様である。

戦時下の村の生活をまもるものとして、共同保育所と共同炊事とは、姉妹の様な密接な繋りを持つて發展して行かねばならぬものであらう。

この様な意義を持つ栄養給食を實行するには、先づ村の人々の理解と協力を得ることが第一に必要なことである。先の母の會の例の様に、閉所式の時お母さん達の側から話が起り、お母さん達の手で計畫が進められて行く様な結果になつたのは一番よく行つた例であらう。それから後は保母やお母さん達の實際的な相談によつて、次の農繁期迄には、給食開始の準備が出来上ることであらう。新しく始める時は、開所前に持たれる準備打合せ會の時是非問題にしたい。

町村當局、學校、農會、産業組合等と連絡をとつて、給食材料をやすく買入れたり、献立その他の指導をしてもらつたりすることも必要である。給食をしたところはそれだけ府縣の奨励金も多くもらへる。

次に人手の問題であるが、出来るなら毎日お母さん達が二人づつ位交代に來て炊事をするよ。併し實際にはなかなか困難であらうから、村の比較的閑な女の人を専門に頼んで、お母さん達は十五分でも三十分でもそれを手傳ふといふ方法でもよい。その土地の事情やお母さん達の氣持などよく考へ合せてきめなければいけない。お母さん達同士が相談し合つてきめれば一番よい方法がわかるだらう。「うちでは忙しくて給食の手傳ひに出られないから、人前が悪くて子供を託兒所へ出すにも出されぬ」などと云ふ聲が出ない様に氣をつけねばならない。

給食の爲の設備は、保育所の設備の項に擧げたが、これ等の道具を一度に新調するのが困難な時は、村の集會用の炊事具を借りるとか、お寺から借りるとか、又めい／＼で少しづつ持ち寄るとかするとよい。

米、野菜、魚、調味料、燃料等は、やむを得ぬ場合だけ現金で買ふとしても、なるだけ現物持寄で間に合せたい。例へば、米は、開所の時纏めて各戸から持つてきて置いてもらふとか、又は毎日一合乃至一合半づつ子供に持つて來させるなどの方法がある。野菜は、前以て、どの家からは何をどの位出してもらへるか知らせてもらつておき、それによつて献

立を決め、毎日その日の分を出してもらふ。

神奈川県吉田島季節保育所の如く保育所の空地に野菜畠を作つて置きそれを利用するか、同縣青我小學校季節保育所の如く學童の作つた野菜をもらふなどは、大いに學ぶべき實例である。又燃料も小學生を動員して薪拾ひなどして貰ふとよい。

くれぐれも氣をつけねばならないのは、會計をキチンとつけ、閉所の時それを誰にもわかる様に明示することである。此の點が曖昧だといらざる疑問も抱き易く、面倒なことが起り易い。

献立は、附録に擧げた参考書等を見て皆で相談しあひ、縣廳の營養技手の人などにみてもらふとよい。食器も少くて済み手數もかからず、小さい子も食べ易い點から、ませ御飯のおにぎりなど便利だと思ふ。(參考篇参照)

調理の上の注意

(イ) 健康な人が調理すること。調理する人は豫め必ず健康診断を受けること。殊にトラホーム、皮膚病、結核等の人、又はチフス、赤痢の保菌者等は絶対に避けねばならない。その人自身は健康でも家に傳染病のある場合には遠慮しなければならぬ。

(ロ) 調理にかかる前に石鹼でよく手を洗ふこと。

(ハ) 廢物を出さない様に。魚の骨、頭、臟腑等、又大根の葉やほうれん草の莖等には大事な營養分が澤山あるから捨てないで利用する。

(ニ) 煮汁を棄てるな。野菜の煮汁にも營養分が澤山あるから、味噌汁などに入れてつかふ。又、野菜は長く水につけて置かないこと、皮をむく前によく洗つて、皮をむいて後は洗はずにその儘調理することなども、同じ理窟から必要である。

(ホ) 年齢の大小によつて給食の量を加減すること。

かうして出來た營養食は、保育所の大きい子供達の手によつて配られる。皆が揃つて一つ釜の御飯を食べる樂しさ。そこには、羨しげに隣の子のおかずを偷み見る子も居なければ、澤庵だけのお辨當を恥しげに隠す子もゐない。嬉々としておにぎりを頬張る子供等の顔を見る時、給食當番の母親の心も明るいであらう。

手のかかる子供

母親の背中にしがみついて離れない子、片つ端から女の子の頭をぶつて歩く男の子、さうかと思ふと一日中隅っこに案山子の様に突つ立つて居て、遊びもしなければ食事もせず、傍へ行つて言葉をかければついと横を向いてしまふ子などは何處の季節保育所にも付き物である。こゝろいふ子供こそ保母泣かせである。一日の計畫も滅茶々にされ、樂しい保育所もたちまち暗くなる。かういふ子供の取扱ひをどうしたらよいか。次に新潟縣金津村保育園根岸まつえさんの經驗談をひいてみよう。

まだヨチ／＼歩きの勇吉さん(生後十九ヶ月)等、送つて來た兄が、學校が遅れさうになると言ふのに、アンニヤ／＼としがみついて離れません。漸く心を鬼にして、引き離して、抱かうとすればひっくり返つたり、引つ掻いたりして、大聲を立てますし、おやつをやつても投げつけてしまひ、お晝になつてもお飯も食べません。仕方がないので、二人がかりで漸くおんぶして、おやつもお握りも背中で食べさせ(半分は私の襟あしと髪の上に食べさせてくれました)ました。

そんな事をして、朝の六時から午後五時頃迄おぶひ續け、漸く少し馴れ、豚等眺めて指さす様になりましたので、ホツとしましたら、今度はしきりに「おちる／＼」と申します。切角機嫌がよくなりましたのにこれは大變、落してはとばかり、確り帯でおんぶし

直しましたら、どうした事か急に又怒り出して、私の耳など掻ります。その時は譯も解らぬ儘に、泣きたい様な氣持になりましたが後で小母さんに聞きましたら、當地では降りるといふことを落ちると申します由。

此の苦勞は、私達保母同士でなくてはわからぬものである。しかも、この話をよく讀むならば、この短い文の間に、手のかかる子の取扱ひ方に就いていろいろと教へられるものを含んでゐるのに氣付くであらう。

先づ第一に、慌てないこと、解決を急がないことである。若しこの場合、即座に勇吉さんを黙らせようとしてあの手この手を盡したとしても恐らく何の効果もないことであらう。否、かまへばかまふ程、勇吉さんはますます泣き叫ぶに違ひない。こんな小さい子が始めて見知らぬ所へ来て、無理々々アンニヤから引離されて知らない小母さんの手に渡されたのだから、泣くのはむしろ當り前のことなのだ。まつえさんは此の子をおんぶして、襟あしと髪の毛を御飯粒だらけにされながらも、朝の六時から夕方の五時迄おぶひつづけたのである。

この様な保母の落着き、この様な愛情、この様な辛抱強さこそ、困つた子供を取扱ふ上に何よりも大事なことである。勇吉さんも、夕方の五時頃には、豚を眺めて指さしたり、降りて遊ぶなどと云ひ出す様になつたのである。かうなればもう占めたものである。

慌てないこと。辛抱して時を待つこと。ではたゞ子供の泣くに委せて放任して置けばよいのであらうか。否、そこには矢張り保母の工夫と努力が盡されねばならない。努力と云つて、たゞ徒らにやきもきすることではない。何故泣くのか、何故暴れるのか、その原因に遡つて考へてみる事が先づ必要である。そして出来ることならその原因を取除いてやる。おしつこが出たくて泣く子にはおしつこをさせてやる。滑り臺の奪ひ合ひからぶちつこをしてゐる子供には、かはり合つて乗ることを教へてやる。簡単なことならこれで解決がつくが、實際の場合にはなかくさう旨くは行かない。勇吉さんの泣き出した原因を取除くには勇吉さんをアンニヤの背中に返してやればよいのであるが、それが出来る位なら何も保

育所を開く必要はない。

この様な場合には、一つには子供の氣をまぎらすことである。つまり、好きさうな玩具を興へたり、面白いものを見せたりして、泣くことや暴れることに夢中になつてゐる子供の心の方向轉換をさせることである。

もう一つには、暗示をつかふこと。「ほら、タケちゃんは先生が目を瞑つてゐるうちにいたづらをやめますよ。」などと云つて目を瞑ると、子供はその氣になつていたづらをやめる。

もう一つは、問題を子供全體の前に持ち出し、みんなの問題として考へさせ、處置を講じさせることである。これは意外によい結果を生むことがある。例へば、

「金ちゃん一人騒ぐから、どうしても皆晝寝が出来ないね。どうしたらいいか、皆で考へて頂戴。」といふ。

子供等は口々に、「金ちゃんを外へ出すといふ。」と云ふ。皆にかう云はれると、保母に叱られるより數倍も金ちゃんはしよげてしまふ。そしてすぐと外へ出て行くが、騒ぎをやめるかするより仕方がなくなつてしまふ。

又私はこんな例も経験した。

四つになる男の子が二人で、どうしたはずみか掴み合ひを始めてどうしてもやめない。保母も手の施し様がなくと、七つになる女の子が、いきなり片方の子の手を取つて相手の頭を撫でさせた。

「ほら、メンコ／＼してみさい。(かわい／＼してごらん)」

頭を撫でられた子にしてみれば、悪い氣はしない。かうして二人は、お互ひに頭を撫であつて、遂に和解したのである。

七つのネエちゃんの功績は偉大なものではないか。

かうして物ごとを子供達自らで處理して行くといふやり方は、困つた問題の解決法として役立つのみではない。大人に指圖されなくとも自分から進んで物ごとを工夫し實行する積極的な子供を作る唯一の方法なのである。

又、いつもその場の解決法だけを考へずに、毎日の生活の中で「泣かない強い子の話」をきかせたり、「よい子の唄」を教へたりすることによつて、困つた性質そのものを段々に矯して行くことを心掛けねばならない。

次に、個々の場合についてこんな取扱ひ方もあるといふ例を擧げてみよう。勿論これはどの場合にも當てはまる處方箋ではない。これを参考として、その場に應じその子供に應じて新しい方法を發見することこそ肝心なのである。

(イ) 家の人から離れない子

殊に開所の始めの頃、小さい子などは随分これで保母を惱ませるものである。

忙しい用事を持つてゐる母親には、思ひ切つて無理に子供を引離してでも歸つてもらふ。するすると留まつてゐるは限りないからである。すると子供は必ず泣くにきまつてゐる。母親は「あまり泣くから託兒所をやめさせようか」と眞剣になつて考へるかも知れない。保母は子供を慣れさせる爲にいろいろ工夫すると同時に、母親が夕方迎へに來た時には、始めはどんな子でも泣くものだといふこと、泣かれる方も辛いがそこを辛抱するのが肝心だといふこと、又保育所へ來れば子供の爲にもなることなどよく話して納得してもらふ様に努める。

小學生の兄ちゃん姉ちゃんにくつついて離れない場合には又事情が少し違つて來る。次に、童話作家川崎大治氏の工夫を一例として紹介しよう。

「幼児が學童にくつついて離れないのにも困つた。かういふのは自分獨りで振舞ふといふことに對して餘程自信がなかつたり甘つたれたりするところから來てゐるのだが、どうも始めから無理に引わけて、たゞさえ賑かな保育所を、泣きわめきのコーラス場にするわけにもいかないので、いろいろ考へた末、遊戯の中で次第にこれを分離させる事に つとめて成功した。『ハトポツポ』の様な簡単な歌といつしよに、手をたゝいて、學童も幼兒も一しよに歩く。一まはり廻ると、上學年から順番に子供をへらして行き『さア一年の人、のいてごらん。今度は學校へいつてない人だけで

自分でやるんだよ。そうら。』と、又オルガンを弾く。『えらいく、よく出來たなア』と、又七つ六つ五つと順にへらしていき、下へいくほどよいほめてやる。といふかういふ方法で、やつと小さい子供だけの遊戯も、五日目あたりから出來るやうになつた。」(「保育問題研究」昭和十四年八月號)

(ロ) 泣く子

先にも書いた様に、先づ何故泣いてゐるかを確めて、その「わけ」を取去つてやる。

小さい子など、託兒所に慣れない不安と恐怖もまじつた氣持から泣くのが多い。さういふ子はおぶふなり抱くなりしてやさしく慰さめてやり、先づ保母に親しみを持つてもらふ。そして氣持が少し落着いて來たら、豚小屋を見せるのもよいだらうし、繪本やおもちゃを興へるのもよいだらう。かうして氣をまぎらして泣くことを忘れさせるのである。反對に、慣れ過ぎて甘えから泣く様な子は、いつそのこと構はないで泣かせて置く方がよい場合もある。やめたくとも今更やめるのも具合が悪いといふ様な氣持から情勢で泣き続けることもある。そんな時保母は快活にその子の手をとつて、「さ、きれいな顔になつて皆と遊びませうよ。」と顔を洗はせる。そしてさりげなく遊びの仲間へ入れるのである。

「泣く」といふことは子供から子供へ傳染し易い。一人が泣くとあつちでもこつちでも泣き出し、大變な騒ぎとなることがよくあるから、泣く子はなるだけ皆から離しておいた方がよい。

(ハ) 遊びの仲間入り出來ない子

大抵は、家で一人で遊びつけてゐたのが急に大勢の中へ出されたので怖氣づいてゐるのが多い。保母はさういふ子には特に温かい心を示してやる必要があるけれど、決して大勢の前でその子と呼んだり、話しかけたりしてはならない。大勢から注目されるといふことがかういふ子供にとつては身もすくむ程恐いことなのである。そつと目立たな

い様にいろいろ氣を配つて保姆の温かい氣持を傳へ、保育所を居心地よいものにしてやる。一度に大勢の仲間に入らず、先づ二、三人のおとなしい子を連れて来て、保姆も一緒に三、四人で遊ぶことから始めて、段々と皆と一緒に遊べる子に馴らして行く。

(二) 口をきかない子

これも大體に於て保育所生活に慣れない所から来る。かういふ子には、特に注意をむけたり、又無理に口をきかせようとしたりすることが一番いけない。普斷保姆はむしろ何氣ない顔をしてゐた方がよいかもしれない。誰もゐない様な時そつと傍へ行つて、『あんたのかあちゃん何してるの。』とか、『あんたのうちに赤んぼゐるの。』とか靜かに話しかけてみるのもよい。

(ホ) 暴れつ子

暴れつ子も又村の保育所にはきつとる。慣れて来るにつれて保姆の制止など尻目にかけて暴れ廻る。保育所の外へは勝手に出掛けるし、ブランコや滑り臺は獨占する。小さい子は泣かせる。集りの時間にはふざける。かういふ子供に對して保姆は甘い顔ばかり見せて居ず時には厳しく叱つてやるのもよい。又こらしめてやる必要がある場合もある。けれども又、何故こんな暴れるのであらうかと考へてみる時、次の様な場合が多い。即ち心にもからだにも元氣がみちみちてゐて、女の子と一緒にやる唱歌や遊戯位では退屈で仕方がないのである。暴れるのは一つには元氣のはけ口を求めてゐるのである。そこでかういふ子の爲には、お天氣のよい日はなるたけ野や山へ連れて行つて駆け廻らせるとか、同じ遊びにしても角力とか駆けつこなどの活潑なものを選びなどすることが必要になつて来る。机を運んだり、お皿を配つたりの用事をさせると、かういふ子に限つて喜んでしかも上手にやり遂げる。小さい子の世話なども案外よくやつて微笑ませることがあるし、小さい子も又かういふ強い兄ちゃん達の云ふことはよくきくのである。

(ハ) 遊びの邪魔をする子

皆で一緒に遊んでゐる時、一人、二人の子がふざけて邪魔をする爲、全體の遊びがめちやく／＼になつてしまふことがよくある。さういふ時は、皆にむかつて、『この邪魔する子達をどうしませうね。』と相談するのもよいし、又は黙つて群の外へ除けてしまふ。これから邪魔をしない約束が出来たら始めて仲間に入れてやる。

(ト) 喧嘩する子

子供は實によく喧嘩をする。喧嘩する子にぶつかつたら、先づ二人の子供を落着けてから靜かに今迄のいきさつをきいてやる。そして、悪い方の子によく納得させてから自發的に詫びさせる。

併し、子供の喧嘩さえ見れば慌てゝ飛んで行つて無暗に手を出すのも考へ物である。或る時は保姆はわざと知らん顔をしてゐて、子供同士でできまりをつけさせる方が却つてよいこともある。

ごく小さい子の喧嘩は、一つしかないおもちゃの奪ひ合ひや、からだのぶつかつたことなどから起ることが多い。小さい子に喧嘩の『いきさつ』などきいても解らないから、保姆もはいつと一緒に一つのおもちゃで遊ぶとか、又お互に頭を撫でさせたり、何か面白いことに氣をむけたりしてやると、自然に機嫌もなほり、ケロッとして遊んでゐる。少し大きい子のおもちゃの奪ひ合ひなどは、ジャンケンで勝つた方から先へつかはせるのもよい。

乳呑兒をあづかるには

近頃季節保育所の數は各地に非常な勢で殖えて來たが、そのうち乳兒を預る保育所はまだまだほんの僅かである。この爲、大人の留守に赤ん坊が爐に落ちて大火傷をしたり、又寝てゐる顔を鼠に嚙られて怪我をしたなどといふ悲劇が未だに

あちこちに聞かれるのである。六、七歳にもなると村では結構赤ん坊のお守に役立つ。大事なお守つ子を保育所にとられて却つて赤ん坊の始末に困るといひ出す家さえ出来てくる。

保育所が、母達の労働を助け乳幼児を護るといふ使命を果す爲には、どうしても乳児を預ることが必要だ。それなのに大部分の季節保育所は乳児の入所を拒んでゐるばかりか、數多い府縣の季節保育所の手引書の中には、「設備もかかり、保育も難しいから」との理由から「乳児は預らずにすむなら預らぬ方が安全である」と教へてゐるものすら尠くない。乳児を預るに完全な設備と完全な保育を望むことは、少くとも今日の農村には不可能なことは事實である。けれども、激しく働く母の背に一日中括りつけられて田んぼにくらす赤ん坊、又道端の荷車の上に放り出されて泣き叫ぶ赤ん坊をいたる所の村に見掛ける今日、一と所に集め静かな場所に寝かせ、付ききりで保姆がみまもるといふたゞそれだけのことに留まるとしても、保育所に暮すことが赤ん坊にとつてどんなに安全な状態か知れないといふことは明らかである。むづかしく考へれば限らないが此處では人手さえあればどここの保育所でも乳児を預ることが出来る一番簡単な方法を書いてみよう。

一、設 備

保育所で乳児をも預る場合、その爲に特に設備しなければならぬことは何であらうか。

乳児室——大きい子供達の暴れ廻る場所に乳児を寝かして置くことは出来ない。

別に乳児の爲に部屋がとれるなら問題ないが、その出来ぬ場合は、小學校から衝立を借りて来るなり、綱を張つてカーテンを下げるなりして室の一部を割つて乳児室とする。(カーテンの代りに、田舎によくある大風呂敷、又は敷布などを下げてよい。)

乳児室には、なるべく日當りよく、窓のあけたても便利な場所を選びたい。且つ、田んぼから上つて来た母親が足袋はだしの儘腰掛けて授乳出来る様な所が附いてゐると都合がよい。

乳児室の床が板の間なら蓆、疊、薄縁等を敷く。匂ひ出す頃の子は何でも拾つて口に入れるから、特に床はいつも清潔に拭いて置き、危険な物など落して置かない様によくよく氣をつけねばならない。

寝具——蓆の上に蒲團を敷いて寝かせただけでもよいが、便利な行李の利用を勧めたい。行李のある家からは持つて來させ、足りない分は借り蒐める。その中に蒲團を敷き赤ん坊を寝かせる。蓋があれば蓋の中におむつその他を整理して入れて置けば大變便利である。掃除の時など行李の儘持ち運ぶことも簡単に出来る。

敷布團、毛布、掛布團等各一枚づつに枕があればよい。これは家をつかつてゐる物を持つて來て貰ふが、ちゃんとした物を揃える必要は少しもない。敷布團がなければ座布團でよいし、掛布團の代りはねんねこ絆纏で結構である。毛布、枕等は場合によつてはなくても間に合せることが出来る。

告知板——小さな黒板を懸けて置き、子供の名前、年齢(満何歳何ヶ月)、健康状態、母親の働いてゐる場所等を書いて置くくと大變便利である。

おむつ整理箱——行李の蓋がつかへぬ場合には空箱をいくつか寄附してもらひ、名前を書いて一人づつ整理しておくことよい。袋や風呂敷に入れて置くよりも、出し易く急の間に合つて便利である。おむつ、パンツ等の備へつけ——家から持つて來たおむつだけで間に合はぬ様な場合の爲に、保育所備へ附けのおむつ、パンツ等も是非用意して置き度い。

便 器——特別の便器は要らない。少し大きな井や鍋などの古くなつた物をその儘使へば立派な便器代用品となる。

その他、洗面器、手拭ひ等は乳児専用の物が欲しい。牛乳をやる場合には、哺乳器等が要り、入浴もさせる時は盥等が必要なのは云ふ迄もない。又、風船、折鶴等を部屋に吊してやつたり、ガラ／＼、毬、太鼓等の玩具をも出来れば備へてやりたいものである。

體溫計——子供の氣嫌が悪くて泣いてばかりゐる場合などには體溫計を用意しておいて熱の有無を調べてみる。乳